

左の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 傍線部①「帰省」③「継母」(訓読み)⑥「全う」の読み方をひらがなで書きましょう。

|   |  |   |  |   |   |
|---|--|---|--|---|---|
| ① |  | ③ |  | ⑥ | う |
|---|--|---|--|---|---|

2 傍線部②はなぜそんなことをしたのでしょうか。その理由を本文中から20字前後で抜き出し、解答欄に合うように最初と最後の3文字を書きましょう。

|  |  |  |   |  |  |  |    |
|--|--|--|---|--|--|--|----|
|  |  |  | ～ |  |  |  | から |
|--|--|--|---|--|--|--|----|

3 傍線部④は、何に対して謝っているか書きましょう。

4 傍線部⑤は、どんなことに対して大丈夫と言っているか、書きましょう。

年末年始の帰省で墓参りをした人もいるだろう。詩人・石垣りんの作品に、こんな一節がある。

〈少女の日／村人の目を盗んで／母の墓を抱いた〉(「村」より)

りんの母は、関東大震災のとき子供をかばい、落ちてきた梁を背中に受けたのが原因で半年後に亡くなった。りんが4歳のときである。その後、父は再婚を繰り返し、りんは3人の継母をもつ。実母を慕う心を周囲に見せるのははばかられたのか、誰もいないときに母の墓石を抱いたという詩である。

りんは東京生まれ、東京育ちだが、両親の実家は伊豆で、石垣家の墓所は子浦という港町にある。独身のまま定年まで銀行に勤め、2004年に84歳で亡くなったりんも、ここに眠っている。

彼女の詩を愛読してきた私が初めてこの墓所を訪れたのは8年前のことだ。そのとき地元の人から聞いた話では、生前のりんに本当に墓を抱いたのかと尋ねると、「抱いた」と答えたそうだ。

昨年春、りんの評伝を文芸誌に

## 母の墓を抱いた詩人

### 随想

梯 久美子

連載することになり、その報告に改めて墓参りをした。長い坂道を上った先、港を見晴らす山の中腹に墓所はある。りんが抱いた母の墓石は海風に白く磨かれて清潔な佇まいを見せていた。いま、その同じ墓石の下にりんの骨もある。母とりん、2人の墓である。

りんの母は死の間際、子供たちの名を呼んで、すみません、すみませんと泣いて謝ったという。りんは祖母にその話を聞いたときからずっと、どんな困難に出会っても一大丈夫よ、お母さんと答えてあげたとなると書いている。

愛し愛された人のもとから、死者はいつまでも去って行かない。亡き母に支えられてりんは大人になり、働き、詩を書いて、いのちを全うしたのだと思う。



かけはし・くみこ ノンフィクション作家。1961年

熊本市生まれ。北海道大卒業後、編集者を経て文筆業に。「散るぞ悲しき」で大宅壮一ノンフィクション賞。「狂うひと」で読売文学賞など。

## NIEワークシートのこたえ（2025年1月8日公開）

### ◆ワークシート「詩人石垣りん(国語)」 2025.1.7付 夕刊 1面 解答

- 1 ① きせい ③ ままはは ⑥ まっとう
- 2 実母を～られた から
- 3 子供たちを残して先に死んでしまうことに対して謝っている。(同意可)
- 4 お母さんがいなくても、自分はしっかりやっているから心配しなくて大丈夫だと言っている。(同意可)